

《目的》近世・近代をとおして女性の化粧を考える上で、女性向けの礼儀作法の伝授はぬきにしては考えられない重要事項である。化粧は、江戸時代には礼儀作法のなかの重要項目のひとつであった。江戸時代におこった女性向けの礼儀作法の一派である水嶋流は、大名家の婚礼に影響をあたえるほどの隆盛をみた。また、一般の女性向けの教養書にもその影響がみられる。しかし、その水嶋流は、江戸時代以降はすっかりすたれてしまったと考えられていた。女性向けの礼儀作法は、江戸時代末期から近代にむけてどのように伝授されていたのかを文献をとおして探りたいと考えている。

《方法》江戸時代にあらわされた伝授書ならびに、『水嶋ト也由緒書』、また近代にあらわされた礼儀作法書から、その伝授系路をあきらかにする。

《結果》大正5年発行された『禮法かゞみ』は、小笠原流師範十八世家元日野節齋があらわした女性向けの礼儀作法書である。この書には、礼法の起源が説かれており、「小笠原流の傳系」という章のなかでその正統と来歴を詳しく述べている。その八世に江戸の人水嶋ト也之成（みずしまぼくやゆきなり）の名がある。江戸時代に途絶えてしまったと考えられていた、水嶋流は、小笠原流の伝授のなかに取り込まれたかたちで大正時代にまで伝授され続けていたことがあきらかになったことはたいへんに重要であると考えられる。